

第2巻 第1章 ^{たばねまつ} 把松稲荷神社

特に養蚕農家等の熱い信仰を集めたとされる。ここは2023(R5)年7月31日(月)～8月1日(火)清川行人小屋泊の2日、阿部剛士と大沼の二人による調査結果を図－1～図－3に記述する。



図－1

把松稲荷神社外観



同社内部



図－2 a

清川道から同神社に至る古道に入ると、図－3㊦・㊦のとおり、池と傍にごっつい松(?)の大木2本があり、鳥居(山門)を思わせる。

境内（建物）の入り口左右にある、献燈ではなく、鳥居（あるいは鳥居脚）擬きなのか？



建物に向かって左側



建物に向かって右側

図－2b



図－3

把松宮（把松稻荷神社）再建に係る経緯の資料に接したので記載する。西川町史資料 第三十一号
－水沢村文書（二）－の解説より、要点を抜粋する。

・・・元々は修験の修業場で、出羽三山信仰拠点の一つであったようである。その後、大江家(大江院)が京都より稻荷大明神を分霊し、次に「近松屋」と呼ばれた近松家(現在地)に譲渡され、養蚕の神として非常に賑わった。下山時、「队(かます)から銭がこぼれる」くらいあったとの逸話がある。「西村山郡神社誌(大正八年)」によると「創立不詳、別当龍沼寺、元禄三年(一六九〇)四月に再建」とある。

寄進に係る把松宮再建勸化帳は、天保十一年(一八四〇)に二回目の再建するための勸化(浄財)帳である。今回も龍沼寺が別当で百五十年ぶりの再建となる。地元水沢村本郷が六十六件、枝郷小沼(下小沼)十件、上小沼七件を入れると八十三件となり、総計二百六十九件の三割を占める。金額は、実に五割に近く地元の産土神的な信仰から半義務的なものもあったのかもしれない。参拝者は、岩手・宮城・福島県と広範囲に渡っている。少数ではあるが参詣者(檀家)の実態であろう。外に、近隣では、綱取本郷二十六件・枝郷沼平十七件で件数、金額共に多い。同じく近隣である岩根沢、本道寺が少ないのは、三山信仰と重複していたからだろうか。羽黒からも「鳥目百銅(百文)」という名称の勸化があったことは交流の証であろう。総勸化金額、二万七千百三十四文(約八両)となるが再建費用の何割なのか。また、別当である龍沼寺の負担はどのくらいなのかは興味あるところである。

(end)